

藤原内科の 5年間のできごと

平成16年1月24日(土曜日)開催



今回の講演者は
藤原内科院長
藤原正隆
です。

第27回健康教室は、藤原内科の5年間に起こったいろいろな出来事について、院長の反省も含めながらお話ししたいと思います。

藤原内科開院までの足取り

昭和29年、私が生まれた年に、私の父である前理事長、茂夫が高木町のこの地で耳鼻咽喉科医院を開業いたしました。父が若い頃は1日200名近くの受診者がありました。私も小学生の頃、父の診察室を覗いたことがありましたが、子どもながらに「お医者さんって忙しいんやなあ」と何となく父が偉く見えたものでした。その後、私が大阪医科大学に進み卒業と同時に今の副院長と結婚。医師としての道を歩み始めたわけですが、すぐに父のあとを継ぐことは、考えていませんでした。しかし、平成2年7月、元気であった父が急に脳梗塞で倒れました。4ヶ月ほどの休診を経てなんとか診療所を再開しましたが、受診者数は最盛期の十分の一以下に激減。そろそろ開業を考えざるを得なくなってきました。私が大学を退職し、平成10年6月に開業したときは、まさにゼロからの出発でした。

藤原内科の新築

旧藤原医院は築25年が経過していたこと、そしてこれからの高齢化社会を迎えるにあたり、エレベーターの導入は必須と考えていたので、思い切って新築することにしました。私は設計士のMさんに、(1)震度7にも耐えられる堅牢な診療所、



満たした、近未来の診療所はこうあるべきだと、自負するにたる診療所ができがりました。

藤原内科が取り組んできたこと

この5年間のなかで、藤原内科はいろいろなことにチャレンジしてきました。(表)まず事務的な無駄を極力省き、患者さんと向き合う時間をより多くとるため、電子カルテをいち早く導入しました。医療情報を電子化するメリットは数え切れないほど

表1

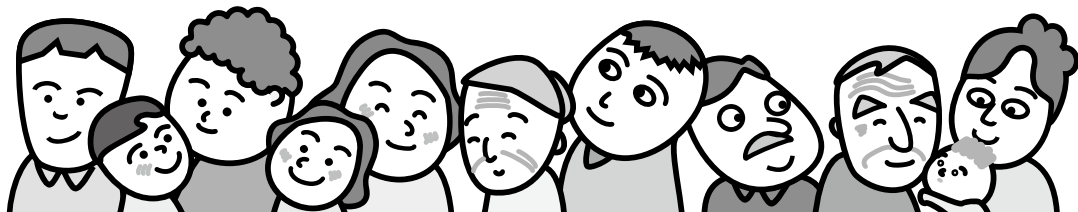
1. 電子カルテの導入
2. 健康教室の開催
3. 院内新聞の発行
4. 禁煙外来の設置

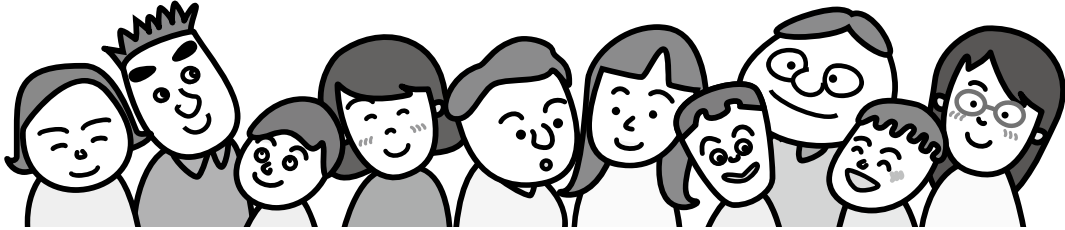
(2)徹底したバリアフリー設計、(3)健康教室開催のための会議室、(4)IT化のための院内LAN設備を注文しました。こうして限られた予算の中で私の要求を全て満たした、近未来の診療所はこうあるべきだと、自負するにたる診療所ができがりました。

あります。(詳しくは「とないです」4号、5号をご覧ください。)電子カルテをうまく使うことによって医療レベルを高め、より緻密で責任ある健康管理をおこなうことが可能になるのです。

そして特に力を入れているのは、開業当初からの構想であった、患者様と私のふれあいの場、「健康教室」の開催です。私の考え方や診療に対する姿勢を理解して頂き、より強固な信頼関係を築きあげていく。これが「健康教室」のねらいなのです。しかし何度か健康教室の後、ある患者さんが「せっかくなりにしていただいたに予定が入ってしまった。」と大変残念がられました。そこで健康教室の「まとめ」を作ろう、そしてどうせ作るなら「院内新聞」として体裁を整え、私の考えを広く知ってもらおうと「とないです」を発行することにしました。年4回の発行ですが、いつの間にか今号で16号となりました。最初は院内に置いておいても、とっさり残っていました。今では楽しみに待って頂いている方もいらっしゃるって、続けてきて本当に良かったと改めて思っています。

禁煙外来は平成11年の7月から開始いたしました。京都禁煙推進研究会に入会し、他の先生方のアドバイスも参考にしながら、月に1人くらいのペースで禁煙指導を行ってきました。2年前からは左京保健所での禁煙支援もお手伝いさせて頂いています。平成13年の6月には、全国的に有名な、あの高橋裕子先生が、藤原内科に遊びに来て下さいました。」と





ないです」第5号に詳細記事あり。平成16年4月まで、延べ83名の方に禁煙を勧めてきましたが、これからもこつこつとアドバイスを続けていきたいと思っています。

一期一会

藤原内科を開院して以来、たくさんの方々に教えられ、また励まされてきました。全ての方々の思い出をここに綴ることはできませんが、私の反省も含め、お二人の方のエピソードをご紹介します。

Hさんの場合

Hさんは78歳、お一人暮らしの男性です。某大病院の神経内科に通院中だったのですが、平成11年6月4日の夕方、発熱と腹痛を訴えて藤原内科を受診されました。数日前からお腹が痛かったのですが、当日、大病院を受診した際、主治医は機械の方を向いたままでHさんの方を見てくれなかつたので、お腹が痛いことは言えなかつたそうです。最近尿に「便」(糞)が混じるようになって熱も出てきたとのことでした。

Hさんは、実は大腸癌で、癌が膀胱へ浸潤し、膀胱と直腸が繋がっていたために尿へ便が漏れ出てきていたのです。そのため尿路系へ感染を起し、高い熱が出ていました。すぐに某大学の消化器外科へ紹介し、入院して頂きました。かなり進行した癌であると思われたのですが、奇跡的にも遠隔転移はなく骨盤内臓器の全摘術で根治が見込まれる状況でし

た。しかし人工肛門、人工膀胱という生活になり、しかも病気が癌であったというところで、Hさんはひどく落ち込んでおられました。私は何度か見舞いに行き、その都度励ましてきました。半年が経過し、人工肛門、人工膀胱の生活にも慣れ、Hさんは無事に退院されました。その後藤原内科に通院されておられましたが、何度か腹部手術後の癒着のためか、腹痛を起され、一度は明け方に博愛会病院へ入院されたこともありました。

それでもふだんは元気に過ごされ、私もホッとしていたのですが、一度だけ、Hさんが夜中にお腹が痛くなったときに、私と連絡が取れなかつたことがありました。たまたま携帯電話の電源を切っていたために、私は電話があつたことに気づかなかつたのです。留守番電話に何回もHさんからのメッセージが残っているのに気づいたのは、翌日の夕方でした。後日来られたときに、その夜は別の医院でお世話になったと聞きました。その後、いつの間にかHさんは来られなくなりました。

「108回の努力によって得られた信頼も、1回のミスで失われる」ということを、まさに身をもって体験した貴重なエピソードでした。

Iさんの場合

Iさんは69歳の男性です。毎年2回、人間ドッグで検診を受けてこられたそうです。「藤原内科の近くのSさんから聞いて来た。」と平成12年5月2日に血圧の管理を希望されて来られました。当日

は心電図、胸部レントゲン写真を撮り、連休明けに血液検査を予定していたのですが、再診時に「3ヶ月前から心窩部に張った感じがある。」と訴えられたので触診したところ、肝臓がひどく腫れていました。これはただごとではないと、直ちに京都大学消化器外科を紹介しました。しかし残念なことに原発巣不明の転移性肝臓癌で、化学療法の適応もないと診断され、某病院へ転院されました。某病院入院後の胃力メウ検査で、胃癌(進行癌)が認められました。

結局Iさんは亡くなられたのですが、ご本人も毎年のように人間ドッグを受けておられたので、きつと自分の身体は心配ないと安心しておられたのだと思います。ただ、ふだんからなんでも相談できるかかりつけ医は、持っておられませんでした。医療の世界も「れば、たら」は禁物ですが、あと1年早く、私とお会いしていたれば、ひょっとして…と残念でなりません。

Hさん、Iさん以外にも、私の心に強く残っている方々はたくさんいらっしゃいます。そのお一人、お一人との出会いが私の経験となり、次に出会う皆様に対する診療の糧となっています。これから初心を忘れることなく、努力していきたいと思っております。

在宅介護におけるチェックポイント

平成16年4月24日(土)開催
午後3時から(午後2時45分開場)
医療法人祥正会 藤原内科 2F会議室にて
講演者は 藤原内科院長 藤原正隆です

今回は在宅での高齢者の介護に焦点を当て、特に介護に当たっておられる方が、日常生活の中で気をつけなければならないことについて、左京医師会で地域医療担当理事を務める院長が、わかりやすく解説をいたします。「明日は我が身」のあなたも、今、家族の介護で大変なあなたも、お聞きのがしなく！どうぞお誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。



医療法人祥正会

藤原内科

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町39の5 TEL:075(781)0976 FAX:075(706)3181
e-mail:in1021@poh.osaka-med.ac.jp URL:http://web.kyoto-inet.or.jp/people/mf_0618

Design:J Yasu